
短編：三丈さん家とマッスルちゃん。

三角

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編：三丈さん家とマッシュルちゃん。

【著者名】

Z5633H

【作者名】 三角

【あらすじ】

当作品は『怪奇！マッシュル・プリンセス』の後日談その2です。季節は冬、シモい母親とノロケ父。レティシアは里帰りにくつ付いて来て……？

(前書き)

このお話は舞丸のHP・『SSS 検索・投稿掲示板Arcadia』にも掲載しております。

「あら、あらあらあらあら！　まあまあまあ…　やった！？　もうやつたの！？　丈夫そうな子ねえプロレスラーみたいで可愛いわ！　あ、おかえりなさい」

懐かしき声。懐かしき匂い。懐かしき玄関。懐かしき顔。懐かしき美的感覚。母親である。

田を弓なりにに、口元を緩やかにつり上げた笑み。浮いた皺が年齢を感じさせるが、片手を頬に反対の手はぐっと突き出し握りこぶし。

ただし人差し指と中指の間から親指がによつきりと突き出している。

親指をこよぽこよぽ出し入れするんじゃありません。はしたない。

俺は取り敢えず片手で宙を叩き、叫ぶ。

「ノーモアセクハラ！　生々しい「メント皿重…………！」

久しぶりの里帰り、どうせだからと一緒に着いて来たレティシアと母親の邂逅の瞬間である。

三文ちゃん家とマッスルちゃん

電車に揺られて一時間と少し。駅から徒歩でもう少し。
ほどほどの大きさでちんまりと鎮座する我が家の大玄関口に、
所さんを揺るがす俺の叫びが轟く。

「……はあ。ただいま戻りましたわ、お母様」

「うむ！ 残念ながら主殿とはまだヤ

「何言つくれぢやつてんだお前えええええーー？」

「ぬう！ 我はただ素直に！」

「あらあらまあまあ！ 仲が良いのねー？ あら私つたら『挨拶もしないで、』めんなさいね。太郎と撫子の母、花子と申しますー」

「ぬ……」母堂！ お初にお目に掛る、私はトキメキ 魔法少女レティシアだ！ いつも主……太郎くんにはお世話になつていまして！ 突然お邪魔して申し訳ないです！」

「微妙に礼儀正しいのかよ！ あ、コイツ只の佐藤さん家のレティシアだから。魔法とかもう本当寒でおかしいだから、ね！」

いい加減親指をにゅぽにゅぽさせるのをヤ・メ・ロ。

「こやかにレティシアと初対面を済ませた母は「うふふ。自分のお家だと思ってゆつくりしてね」手を振り、ぱたぱたとキッチンへ戻つていぐ。

嫌過ぎる下世話をで自己紹介を終えたレティシア達と共に家に上がつた。丁度夕飯の支度をしているのか、揚げ物の良い香りが鼻孔を抜けた。

すんすんと鼻を鳴らしながら大分古くなつた床板を踏み、リビングへ。

ひよこ、と顔を出す。

食卓に泰然と腰かけ、煙草をくゆらせながらシルバーフレームの眼鏡越し新聞を見ている父親を発見。

「おーオヤジ。久しぶりー」

「お父さま、只今戻りましたわー」

「ぬは！ 我は」

「一度ネタやつたら飯抜きな」

「……どうも初めてまして、佐藤レティシアと言います。本日は突然お邪魔してしまって申し訳ありません。お世話になります」

素直だな。飯で簡単に操れる。ふふ。

久しぶりに見る父の、白い物が混じり始めた頭髪を見ると俺も大人になつたのかなあと感傷が過ぎつた。

シックなセーターとゆつたりしたチノパンを身に付けた父親は新聞から目を上げ、

「おつ、戻つ……戻！？」

珍しいことに新聞をかなぐり捨てて立ち上がり目を見開く。実際に激しく足をテーブルの膝に打ち付けて涙目になった。

咥えた煙草から灰が落ちるのを指摘してやると慌ててもみ消す。

おお、母の時は軽くスルーされたが、やつと常識的な反応が。来るか、来るか来い来いフィッシュカモーン。

「君がレティシア君か！ いやあ噂は聞いていたけど思つていたより器量良しだ。あ、こうこうの失礼なのかな」

「ヴあーう

はいダウト。俺は色々説明するのも諦めて、投げやりにソファに倒れ込んだ。

「うなるだううと思つたから家に帰つて來たくなかったんだけども。どう考えたつて普通の感性じゃないよね家の両親。

「いえ、そんな、恥ずかしいです！あの、むしろ太郎くんの方が器量良しと言つか……いつも『」飯作つてもうりますし…！」

「おう、同棲かね！？いやあ将来も安泰だなあ」

「そ、そんな……もうお義父様つたら…」

「『ふ！ち、力強いねえ』

女つて怖い。

暫しの歎談を挟んだ後、レティシアは撫子に連れられて密間へと消えて行く。

俺はそれを視線で見送りながら、多分掃除もされずに絶賛放置プレイであつたらしいことが想像に難くない自室に戻る気が起きないでいた。

『ごりり、とソファの上で回転する。だらしなくもまだ『』ポートを着たままである。というかマフラーすら外していない。それぐらい寒さが嫌いなのだ。

「おい、おい太郎」

「何だよ。来客用似非紳士口調が崩れてるぞ」

宙を睨んで煙草をふかしていた親父が、いつの間にか隣に立っていた。

シユールなポーズをキメつつ、ふう一つと紫煙を吐きだす。

「母さんがあれ位の頃はそれはもう可愛くてな。もう本当に毎日がヘブンって言うかヘブン超過して頑張り過ぎてむしろヘルって言うか。

まあ今でも可愛いんだがよ　その辺、お前どう思つー？　なあど
う思つー？」

「ノロノロノロノロケるんじゃねーよいに年して！　オヤジは
あれか、万年発情期か！」

真顔でぐいぐい詰め寄つてくる父を手で押しやる。

これだ。感覚がずれている母と一言曰には「母さん可愛い」の父。
疲れる。端的に言えば疲れる。ちなみに一度、どれだけノロケら
れるのか数えてみようと思つて一時期数えたことがあるのだが。
俺と母さんの出会い～旅情編～から俺と母さんの青春グラフィテ
ィー、俺と母さんの……と無駄かつ恥ずかしバラエティ～に富んだ
ノロケ話の総数が百を越えた時点で諦めた。

ギネスに申請してやりたい。是非申請してやりたい。

「発情期？　はん、分かつちやあいねえな太郎。万年じゃないん永
遠久遠悠久不滅かつ無限に母さんラブだ。　いいか、テスト出る
ぞ？」

「もつこよでむーか何のテストに出るんですかー」

「あ？　……そつかそつか解いてみたいのか。じゃあまず母さんと
俺の出会い……」

あるのかよ。あるのかよテスト！

よりによってリビングに据え付けの棚を「じゃじゃ」し始める父を放
つて、俺はのつそり立ち上がる。

両親のノロケ話など酒の肴にもなりやしない。いそいそと浴室へ

向かう。

廊下を通り階段へ。ギシギシと階段を鳴らしつつ、俺は一番奥の部屋に真っ直ぐ向かう。両親は一階で寝起きしているので、我が家 の客間は2階。

一階には三部屋あつて、それぞれ俺、撫子、客間で構成されてい る。

軋んだ音を立てるドアを引き、隙間から中へ滑り込む。記憶を頼 りに電灯のスイッチを手探りで探す。

「ででで電源は～、と。お、これこれ」

シングルベッドに小さな机、そして小さな衣装ケース一つしかな いこの部屋が、俺が長年を過ごして来た部屋である。 荷物が少なくて妙に生活感が無いのは、今住んでいる六畳一間に ほとんど持つて行つてしまつているからだ。

大学に入つてから一度も実家には帰つて来ていない。しかし、約 二年前と全く変わらぬ様子の自室に何故かほつと安堵の息を漏らす。 ありがたいことに、俺の部屋は掃除されていたようで大して汚れ ていない。荷物の詰まつたバッグをその辺に放り投げ、コートを脱 ぐ。

おざなりにハンガーにかけると、丁度小さな姿見に自分の姿が映 る。

「……ふむ、厚い」

別に太つた訳じゃない。

ただ着張れているだけだ。半袖長袖分厚い長袖にセーター。それ だけ着れば誰だってモコモコになれる。 気分はマトリョーシカ。

体が割れてしまつ様な斬新な脱ぎ方は出来ないのが残念だ。

窓の所に歩み寄り、一瞬ちらと外を見る。そしてカーテンを引いた。

小気味良い音を立てて外界と浴室を隔てた布の外はすっかり暗くなっている。

ほとんど物のないこの部屋では特にすることもない。

階下から俺たちを呼ぶ声が響いたのでこれ幸い、俺は踵を返した。

「はーーーー 今日の『』飯はこれですよ」

「ゴトリー！」としつかりし過ぎてゐる重量音と共に食卓に供されたソレは、まさに日本を象徴するおかず。

個々として自身の魅力をしつかり主張しつつも、さりとて全体としての調和を感じる程に均一なこんがりきつね色に揚げられたソレ。出来たてであるからだらう、ほくほくと湯気を立てるその食べ物は、テーブル中央で「さあ喰え！ 嘰らうが良い！」とばかりに踏ん反り返つてゐる。

鬼の如く無駄な芸術的バランスで天高く積み重ねられたソレはまさに山。

スペイシーな香りが食欲を心地よく刺激する魔性の媚薬となつて愚かな人間たちを包みこむのである。

「あらあらまあまあ、一ソーン一ク使つてるから」これで太郎の夜もバッ
チリね！？ 明日の太陽はきっと黄色いわね！ さあ召し上がり

「お母ちゃん……」

「つふふ、なあに撫子ちゃん」

「まあこいつなるだらうな、とは思つていましたけれど……」

ナチュラルなセクハラ発言を執拗に繰り返す母親をスルーしてぼ
む、と撫子の肩を叩く。揃つて頷いた。
一緒にテーブルの中央に鎮座するソレを指差す。
せーの、で同時に息を吸い込む。

「「未だに唐揚げしか作れないのー！？」」

「ぬあ……？」

ポカント口を開けたレティシアは一時放つておいて。

「やあねえそんな訳ないじゃない！ 母さん、今や30種類の
バリエーション唐揚げ作れけやつわよ？」

「逆にスゲヨ！」

「むしろ何で唐揚げ以外の料理に挑戦しないんですのー！？」

「母さんの唐揚げは美味しいんだからいいじゃねえの」

謎だ。

総菜でも買って来なければ毎日唐揚げしか作らない驚きの料理スキルを持つ母と暮らしている父は何も思わないのか。

「まあ素敵！ お父さんつたら恥ずかしげもなく…… 明日は朝から唐揚げよ！？」

「せ、洗脳されてるぞオヤジ！？」

「お父様！？」

「主殿……静まるのだッ！！」

至極当然な俺たちの突っ込みから始まつた大騒ぎ。食卓を前に箸を握りしめたレティシアが大きく腕を振り上げた。

ひじり

ゴチン！

食卓に沙黙が満たした。

痛
い！

..... !

「うむ……我はな主殿」

おやじくまつはつ涙田になつてこむであつて田でレティシアをジ
ト見する。

悠然と田を閉じ、大きく頷いたレティシアは思わせ、ふつて言葉を
止め、

「お腹が減つたのだハリー・ハリー！ はやく唐揚食べたい！」

「わつー、と田を見開き田主張。

「あらあらうふふ、じゃあ頑きましょつか。沢山食べて夜頑張つて
ね！？ 大丈夫！ カメラの用意はバツチリだから！」

「母さん！ ビール！」

「仕方無いですわね……ほら、レティシア。お箸はまつ持つんだつ
てこの前教えたでしょ！」

「むう……難しいのだ。我は別にこのままでも」

「ママン後でマジ説教ですよその発言……おこづら筋肉娘さん
？」

「うむ？」

ゆう、と立ち上がる。俺は箸をグーで握りしめるレティシアの隣
までふりつと歩み寄り。

「ゆ、と両の拳を突き出した。

不思議そうにこりりを見上げてこむレティシアの米噉みを挟み込
むよつてソソヒキ。

「唐揚ハリー、ハリーってお前ベジタリアンじゃないのかよ…？俺が毎日どれだけ献立に苦労してると思つてんだイエア制裁——！」

「ぬおおおお……！ あれ主殿結構本気でイタイタイタ痛い痛いごめんなさいごめんなさいごめんなさいお願い梅干しだけひあ——！」

「……おバカさんですのねー！」

ぐりぐり！ ぐりぐりぐりぐり！ とやや内側へ抉りこむ様にぐりぐり。

半泣きを越えて一瞬でマジ泣きに移行したレティシアの米囁みに容赦なく梅干しをかましながら、俺はちよつとだけここ最近の台所事情を思い出していた。

……そう、俺はここ最近、肉などと言ひ、高貴なる食い物を食べていないので何故ならレティシアがベジタリアン宣言したから！ 特売のとりもも肉やミニンチ肉、広がる夢とタツタ揚げ。それら輝かしいお肉の饗宴を完全に自主規制してきたのだ。

肉を食べないと筋肉踊りを披露するレティシアの前で、はいさいですかと一人ガツガツ肉を食う度胸は無い。流石にそれは可哀想だな、とか思つていたのに！ 思つていたのに！

「！？」

「ひあああああああ！」

「えいこのー、ええいこのー！ 何と言えばいいか俺のもどかしい欲望の一撃をエンドレスループ！ ずっと俺のターン！」

「あら欲望の一撃つて……エンドレスつて朝まで…？ 朝までノー

ス！？

「ねやゆれん鼻血が……どれトイツシロを」

みぎゅうと顔を力一杯顰めて痛みに耐えるレティシアを見ると、何だか非常にいけないこと正在している気分になる。

「フフフ、さあ弁解するがいい姫よ！　変なこと言つたら更なるお仕置きが待つていたりいなかつたり！」

「何て言つてゐのそれ！？」

「あら……おし、お仕置を？」の声たら姫なんて言って、世間知らずなのを良ことに縛つたり縛らなかつたりするのかしり？
教えようかしら実地で！？」

「か、母さんは一人の秘かなマンネリ打破というかだねとにかく駄目だ母さんは誰にも渡さんぞ！ しつしつ変態息子め！」

意味不明の奇声を発するレティシアに俺が戸惑つてると、当然の如く投下される最新式言語爆弾両親型。

黙れもしくは別次元へ帰れ。

そんな俺達のすぐ傍で、上品に椅子に腰かけている撫子はちりと
こっちを見て、んー、あー、と喉を震わせてから。

「コホン、勝手ながら通訳いたしますわ……」

そう言って俺たちの視線を集めたことを確認すると。

「これはだな主殿我にとつてベジタリアン宣言は乙女的羞恥心の觀点から遺憾ながら端を発した主義主張であつて主殿の御母堂が折角用意して下さつた手料理をそんな個人の小さな我が今まで無碍にしたくないというか正直主殿のご両親とは是非先々のこと考えて仲良くしたいというか主殿の好きな味を今之内に覚えてこつそり練習して披露して驚かせてやろうとかああああああ！……と、言つてますの」

「アンビリーバボー！ 淫いね妹よ！」

台詞部分だけやけに似ているモノマネでレティシアの謎奇声を解説してみせた。

略いかに原文よじ書いて下さい

驚きの余り俺の相手し真拳も対象者を見失っている

見下ろし、そしていつの間にか無言で俺を注視する家族ズの視線を感じ。

たらたらたらと脂汗を流した

あれ 何だ 一レ 備不発しやね

じわじわと撫子の台詞が脳に沁み込むに連れて。ついでに米噉みを分厚い皮グローブの如き手で押さえたレティシアがこくこく頷くのを見て。

非常にマズイことをやらかしてしまったのを理解した。 それと恥ずかしくて顔が熱い。

何だこつそり練習してつて……う、嬉しいじゃねえかちくしょー。
俺は一步、二歩と食卓から離れる。

「ふあ！？ あ、主殿そんないきなり助走を付けての飛び込み土下座とは難易度が高すぎるぞ！」

「あら、久しぶりに踏み易そうな……踏み……はつ、な、何でもありますか？」

「平に！ 平にお裁きの程を～～～～！」

ぐりぐりと床に額をこすりつけ、謝罪。マジすんませんでした。撫子の発言が気になる所だが、俺にそんな余裕はないのだ。それに撫子の発言がアレな感じなのはいつものことなのでスルー。

「面を上げるのだ、主殿。まあ、主殿に何も話していなかつたのは
私の手違ひであるし……そ、その……」

「ぐり。顔を上げた俺含め、なんとなく家族全員が喉を鳴らす。

「そ、その……？」

「……主殿が、筋肉状態な我と一緒に同じ布団で寝てくれるのでは
れば！ まあ、許さないでもないかもしれぬ！ ぬはー！」

あれ嬉し、いや罰ゲエエエーム！ それ何て罰ゲ。明らかに余計な形容詞が付いておりますが訂正は出来ないのでしょうか！？
……いや、そもそも口リーできよぬーな状態で同衾したら確実に

俺の少ない理性がゲフンゲフン。

というか家族の前でどんだけ攻めの姿勢なんだ姫よ。

などと、言える訳が無い。

現在三丈脳内国の法廷である最高裁判所は常に第一審にして最終審。

俺は自身フルボッコ法第三条女性に対する謝罪第一項に抵触する被告の（刑事事件ではないので被告人とは言わないぞ）立場に立っているのだ。

自分で言つていて意味が分からぬが、とにかくこんなことしたらもうこれフルボッコ確定だろー、という何気ない俺の思いつきが生んだ独自法である。

凄まじくどうでも良いが、そういうえばそんなことを考えたこともあつたなあと若き日の過ちを思い出した俺は、唯唯諾々と頷いた。

「あー、謹んでお受けいたします」

「ぬ、ぬはー」

「……やつてられねーですの」

「つふふ、はいお父さんビール……カメラの充電大丈夫だったかしら？」

「お、母さん有難う。大丈夫だよ昼間充電しておいたから。それより早く母さんの唐揚げげげげ」

「まあー 素敵！ お父さんつたひめつお茶田さんねえ。はい、お上がりなさい」

死ぬ程恥ずかしいが何だらうか」「...」優しさ？　流しても良いのだろうか。

俺とレティシアを残して、いつの間にか食卓は完全なるご飯モードに移行している。

一家団欒、と言つべきその光景を見て、俺は何だか毒氣を抜かれてしまつた。

気になるのは脳が故障していると思わしき母の言動だけだ。

もういいや色々。とりあえずご飯を食べよつ。箸を伸ばして唐揚げを一つパクリ。

「……うーん？」

散々食べ飽きたはずなのに、何でこんなに美味いんだろう。レティシアがこの味をモノに出来るのかどうか。帰つたらまますま、包丁の握り方から教えてみようかなあ。

「ぬは！　御母堂の唐揚は美味でありますなー。後でレシピをばー...」

「あらあらひふふ、勿論よ」

「太郎ー、今すぐこ、そつ正に今このタイミングでお風呂入っちゃいなさいー」

「うーー

食後しばりく。

後片付けもてきぱき終わらせ、無限ループするノロケ話を聞き流しながらオヤジの晩酌に付き合つた後の手隙の時間。
ほんのりほろ酔いでぽかぽかと暖かい体を動かして、俺は着替えを手に浴室に向かう。

一人暮らしの貧乏アパートでは浴槽が狭いのでゆっくり出来ない

のだが、実家のお風呂は結構広め。

思つねま足を伸ばすことが出来るのは単純に嬉しい。

「いーい湯、だーーな、ハハハン」

「ん?」

懐かしの風呂ソングを口ずさみながら浴室の戸を開ける。

何故か灯りの点いている脱衣所に、眉をしかめて戸を細める。

「ぬはーは、ぬははー 風呂風呂筋肉ポージングー おー? あ、主殿!」

扉を閉めた。

「ふうー……疲れてるのかな。俺」

眩き、眉間を揉む。

バタムーと急激に開かれた扉の方を見ない様に顔を背けていると、

「主殿ツ！ 女子の入浴準備中に浴室無断侵入するとはなんという
破廉恥なのだツ！？ だが我はエブリシングエブリタイム全て受け
止めて見せるぞ！？ さあさあ一緒に風呂入るか風呂入ろうさあさ
あさあ……！」

酔っぱらっている俺の精神を容赦なくへし折る物体Xはそうのた
まつた。

ガシ！ と頬を掴まれ、ぐぐぐと背けた顔を自分の方に向けようとするレティシア。

抵抗もなしぐ一ギリ！ と異音を立てた俺の首は全面陥伏。俺は遂に、遂にその物体Xを直視してしまう。

……一千世界に遍く存在する諸兄に電話でお聞きしたい。

脱衣所で女の子とはつたり遭遇 そういうイベント時、女の子はどういう格好をしているものだろうか?

馬鹿な！ 古来より伝わる定番イベントをブチ壊しにするア
ンチ萌えクリーチャーの存在を悔ってはいけないのである。
近頃精神爆撃されることが減つて油断していた俺が悪いに違いな
い違いない……！

臙脂のリボンにプリーツスカート、特徴的な肩後ろまで広がる紺色の大きな襟。

脱衣所の灯りに照らし出される豊満（みちみちと張りつめている的な意味で）な体が纏うのは、そう、セーラー服。

想像できるだろうか？

身長百八十センチ超。間違いなく屈強な女性世界一でギネスに載れるダイナマイトバディを持つレティシアが着るのは、小さめセーラー服。

可憐な女学生が身につければたちまち可愛らしい若々しさを放出するソレを纏つたレティシアは正に悪魔そのもの。

懐かしくも甘酸っぱい学生の頃の思い出など一撃で粉碎である。

盛りあがつた肩、分厚過ぎる胸回りは本来伸びるはずのない素材の衣服をパツンパツンに張りつめさせ。

短すぎる裾の下には相も変わらず脂肪の欠片も認められないハツ割れ腹筋とおへそがもうチラチラとチラリズム。

普通サイズであろうスカートは、それこそあひつとかミニスカート扱いの短さ。

そこから伸びる、大木の如き力感を感じさせる筋肉ぼこぼこ絶対安定丸太足は、今にも張り裂けそうな膝上黒ニーソを装備中。

その上に、定番となつた極普通に美少女なレティシアのお顔が、載つていらつしゃるのだ……！

ゴスロリを着せた時以上の衝撃である。何せ、ミニスカートに黒ニーソだ。

動きに合わせて揺れるスカートの裾下の空間は絶対恐怖領域。万が一にも風ではためいて欲しくない。

多分死ねる。

「ひいい……！ 遥かな昔のマコーンかお前……！」

女学生じゃない。海兵隊だ。俺の記憶検索の結果では海兵隊がヒットしている。

着替えも打ち捨てて必死に体を動かし、何とか邪神象の如き御姿から逃れようと暴れる。

「何を言つて、可愛いであつて、？　主殿の御母堂が貸して下さつたのだ………。」

「おま……やつぱつか！」

「うせこなことだらうと黙つたよだつて風呂入れつて声掛けてきたの母親だからね！」

視線を横に振ると、キッチンから顔を覗かせる母と母が合つ。

「ジーザス！　何で」としてくれてんですかあんたあああああい！？」

「あら、うふふ！　だつて2人の性生活に、コスプレは必須じゃない！？」

「直接的な表現禁止！　大体これどこのから……」

「ああつー、な、撫子のセーラー服！？」

「何だと、……おこ振りすな振りすなレティシア痛いいたたた！千切れん！」

騒ぎを聞きつけて現れた撫子の叫びも加わり、更に騒がしくなる

脱衣所前廊下。

俺は指をにゅぽにゅぽさせ「今日あたり行つとく！？　行つとくのー？」とのたまつ母を一睨み。

「お兄さまー、何でレティシアが撫子のセーラー……ああつ、び、どい触つてんのですのー？　……つじの、じのー。」

何故か背後から俺を足蹴にする撫子の攻撃に耐え忍びながら「見よ見よこんな風に脱げるのだぞ！？」遂に脳が故障したのか脱げようと/orするレティシアを押し留める。

そして限界値を振り切ったストレスに対して俺は遂に。

「……ふうー、青春だな、息子よ。俺もお前くらいの時は、母さんが毎日の様にセーラー服やナース、バニーガールの……」

「あら嫌だわお父さん！ 昨日も着たでしょう？」

「もーべついいぢや駄田ですのー。」

いつの間にか集結した面々に対して、半泣きで腹の底から絶叫した。

もう、何でも良いから狭苦しい木造建築に帰りたい。

終
わ
れ
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5633h/>

短編：三丈さん家とマッスルちゃん。

2010年10月21日11時37分発行